

リーディングアサインメント：

政治学概論Ⅰ（2025 年度）第 3 講（1 月 7 日）

原武史ら「座談会これからの象徴天皇制を考える」

氏名	Q1	Q2
安達悠人	河西氏が、昭和天皇は「そこにいればよい」存在だったのに対し、平成の天皇は国民の無関心を避けるために積極的に行動を行い、「天皇制の生存戦略」として象徴の役割を能動的に行っていたと述べた箇所。（26～27 ページ）	全体的に文章が難しかったが昭和と平成で天皇のあり方が大きく異なっていた点が面白いと思った。天皇のあり方が変わったことは習ったことがあったが、昭和では「そこにいること」自体が象徴として十分であったのに対し、平成では国民の無関心を避けるために自ら動き続けていたということを初めて知り、象徴天皇制は固定的な制度ではなく、時代や社会状況に応じて変化していくものなのだと感じた。
市場望友	女性の皇位継承について（p.32、p.33）	「女性」「女系」天皇の皇位継承の問題について、皇族の数が減少していることにより、負担が大きくなっていることが背景にある。女性の精神的な負担や、膨大な仕事、男の子を生まなければならないというプレッシャーなど、様々な課題があることをこの記事を読んで知った。伝統を守りつつ現代の価値観に合った制度を検討する必要がある。
今井朝陽	31 頁、宮内庁の役割	本文にも記載されていたように、天皇の象徴性、政治的な利用を避けるといった観点から、政府と天皇の中間に位置しているという事ができる宮内庁はとても重要な存在だと思ったから。宮内庁の人事の入れ替わりが激しく、人材の育成が必要であるという事は初耳で、難しい立ち位置にいるからこそ、宮内庁に関する仕組みを見直すことが必要だと思った。
大石将輝	天皇の「象徴」の意味と時代ごとの天皇像や正統性の変化が興味深かった。（P25～28）	現代の天皇について、私は被災地を訪れ被災者に寄り添う姿が最も強い印象で、これが自分なりの天皇の「象徴」の意識としてある。しかし本文では、現在の天皇像が「いい人・理想的な夫婦」という個人の人物に依存し、象徴の意味が天皇の行動任せになっているという指摘があり、その部分が興味深かった。また、天皇は昭和は「存在していればよい」だったのに対し、平成以降は積極的に国民と関わる姿が求められ、時代ごとに天皇像や正統性が変化してきた点が重要だと感じた。
尾崎優太	・「おことば」による退位の実現と憲法・制度の乖離（24 ページ～） ・「平成流」の完成と次代へのハードル（26 ページ～） ・皇室の存続と「女性・女系」問題の回避（32 ページ～）	平成の歩みが、制度ではなく天皇個人の資質や努力によって支えられてきた危うさが浮き彫りになっているからです。国民に寄り添う「平成流」が象徴の理想像として定着した一方で、それが次代には到底不可能な「個人的な公務量」となり、皇位継承問題も含め制度疲労を起こしている点が非常に興味深いと感じました。個人の献身に依存しすぎる現在の象徴天皇制の限界を鋭く突いています。
小野瑞樹	自分たちの象徴としての天皇の在り方に、国民、そして政府がどれくらい積極的にコミットできるかということが、今、問われているのではないでしょうか（33 ページ）という点が重要であると考えた。	この文を見て実際に考えてみたとき「天皇」ってどんな人って聞かれたときに「国の象徴」という回答はできるけれど、確かにその原理が腑に落ちていないなと感じたと同時に指摘にもあるように、このような人たちがいるような世の中で果たして天皇の正統性をまもっていけるのかと不安に感じた。この問題に対して政府も勿論かわる必要があるが、教育も政府と同じように一番この問題にかかわっていく必要があるのではと考えたから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
片山翔太	皇族の数が絶対的に減ってしまっている。p32	これは、日本国民全員が考えなければならない重要な問題だと思う。やはり、憲法の第一条で書かれている象徴天皇制であり、日本の歴史的に見ても重要な立場である天皇に関することは日本国民は考えなければならない。天皇制の議論は国会ではあんまり活発なイメージがないし、国内でも活発な議論はなされていないように感じる。そもそも、天皇に関しても印象が薄い人が多いのかもしれない。しかし、これは国民全員が考えなければならない問題だと思うので、極めて重要だと感じた。
兼清琴葉	「天皇制の生存戦略」という言葉 P27	これまで、天皇が各地を訪問したり被災地を訪れたりすることは、歴代行われてきた文化であり、国民の士気を高めるための行為であると考えていた。しかし、それだけでなく、皇室に対して無関心な国民層に働きかけるといった側面があることを知り、非常に印象に残った。また、その役割が拡大することで天皇の公務が増加している現状を知り、今後はその負担をどのように調整していくべきかという課題について考える必要があると感じ、これから象徴天皇制がどのように変化していくのか興味を持った。
亀崎拓麻	面白いと感じたのは、象徴天皇のあり方が、政治制度としてではなく「人としてどう振る舞うか」という視点から語られていた点である。	その理由として、普段は天皇制を深く考えることはないが、この座談会では、象徴天皇が国民との距離感の中で成り立っている存在であることが具体的に示されており、制度というよりも日常に近い問題として感じることであった。難しい政治の話というより、社会の中での役割を考える話として読みやすかった。
河田陽菜	「天皇という存在は遠くて、ぼんやりと『かわいらしい夫婦で理想だ』といったイメージ」の部分 (p.27-28)	私も実際、天皇という存在がとても遠く感じているし、天皇の国事行為も社会科の中で伝えられた概要程度しか把握してないので、テレビで取り上げられている部分が仕事であるという感覚であるから。しかも、その国事行為の様子も優しそうで穏やかな夫婦だという雰囲気を感じ、天皇を失礼な言い方となると思うが、なんとなくかわいらしいマスコットの視点で見がちな部分もあるのだと感じたから。
高坂知希	昭和天皇と平成天皇を比較したときの、平成天皇が80代になっても皆勤で代拝を立てなかった点。(27 ページ)	平成天皇が全国各地を回られていたり、被災地に赴いて国民に声をかけるなど、象徴天皇制が天皇の個人による努力や気持ちといった部分に大きく依存しているように思った。さらに、政治が不十分であるという国民の思いが、天皇に慈愛で補われてしまうのではないかという指摘もあり、令和天皇や今後の天皇などの象徴としての在り方が左右されることだと感じたから。
小松原暖	積み残された課題	皇室が支持される理由に安心感があるというのが記述されていた。現在の皇室では男系が減っており、女系天皇や女性天皇の議論が行われている。そこで女系天皇などの天皇制の問題は、将来的な皇室の正統性からくる安心感に関わる問題であると思うので、外国語が話せるなど時代に合った能力的な点も必要ではあると思うが、旧宮家を含めて皇族の数を増やすことが正統性を維持するという点で必要な議論にもなるのかなと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
角田実咲	国民も政府も「『象徴』という機能は何なのか？」という問いを天皇に丸投げして、「天皇がやってることが『象徴』だよね」としてきた（p26）が重要だと思った。	小・中・高の教育を通して、天皇については「日本国民の象徴」という言葉以上の説明をほとんど受けてこなかった。そのため、私の中の天皇像は、平成天皇が国民と交流する姿から自然と形づくられ、それが妥当かどうかを考えることもなかった。しかし、この文章を読んで、「象徴」とは何かを日本国憲法の解釈として主体的に考え、自分なりの価値観をもつ必要があると感じるようになった。
泉水美夢	4 ページ目 天皇制に対する批判を「しない」ではなく「できない」	私は今まで天皇はいい人という印象が強く、微笑ましい夫婦のように思っていたが、今回この記事を読んで、天皇の人柄に隠れた制度にまで注目することがなかったと感じた。天皇個人の善意や誠実さが強調されることで、天皇制が社会の秩序や歴史とどのように結びついているのかを考える機会が失われていたのではないかと思う。人柄と制度を切り離して捉え、構造そのものを考える視点が必要だと考えた。
高尾里実	P27 昭和は、「いればいい」、威厳があって、そこにいてくださって____というのでよかった。だけど平成の場合は、それだと国民から無関心のまま終わってしまうため、積極的に能動的に動いていった。	昭和における天皇像は何かをする存在ではなく、そこにいればいい存在として捉えられている箇所が、現代における天皇像と大きく異なる点だと思った。現代の天皇は積極的に能動的に動き、国民に寄り添う姿が想像できるから、象徴としての役割が存在ではなく国民との関りに変化していると感じた。しかし、社会は大きく動いているから、天皇の在り方はさらに変化していくと思う。
西田圭吾	「皇室に求められるもの」 p 34	天皇制について行われ続けている皇位継承の議論を含め、改めて皇室の在り方について考えておく必要があると感じたため。また、文献内での「国民が天皇を支持している前提は、安心感だと思う。」という発言に共感し、そうした安心感を担保するためにも、天皇制の安定は重要だと感じた。また、象徴天皇制を考えていく中で、皇室にもとめられていることや、皇室の在り方について考えることが大切だと感じたため。
橋本夏実	国民統治は、「本来的には政治がなんとかすべき問題で、象徴はそのあとに位置づけられるものではないのか」（34 ページ）が重要だと思った。	平成天皇がさまざまな活動に取り組まれる様子を見て国民は天皇への信頼感を持つようになった。令和の天皇には、生活に苦しんでいる人々や在日外国人などへの気遣いが求められるようだ。天皇が訪問すると、当事者は心が温まるだろうが、根本的な問題の解決には至らない。しかし、問題の中には政治の力を使うと状況を改善できるものがある。天皇と国会や内閣の関係性や存在意義がどうあるべきか問われているように感じた。
長谷川隼	平成天皇が、被災地など零れ落ちそうな場所に足を運び、緩やかな統合を図ってきた（34 ページ）	平成天皇が被災地や過疎地など問題や不安を抱えている国民たちのもとへ訪問なさっている場面をよくテレビで見っていたが、今までの天皇ではあまりなかったことなのだと初めて知った。国民の象徴として天皇が存在する中で、国家から距離を置かれてしまっている人々に直接寄り添う行為は象徴を可視化した行為であり、「零れ落ちそうな場所を緩やかに統合する」という言葉はとても興味深いつと感じた。同時に、天皇が象徴して統合の手を差し伸べなければならなくなる目に、政治で十分に対応するべきなのではないか、従来の対応では不十分なのではと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
引地優斗	p 34 の下の方「いい意味と悪い意味があり、私たち自身がその両面があることを認識しなければなりません」	私は、天皇が「国民統合の象徴」として分断された社会の修復に寄与するのは、日本国の象徴の立場として素晴らしい取り組みなのではないかと思っていた。しかしその反面、政治の不作為を覆い隠してしまう可能性であったり、政治本来の役割を奪い取ってしまったといった可能性があることを知り、これまでそのようなことは考えもしなかったもので、面白いと思ったから。
福田伸之介	天皇が行くことでなんとなく不満が解消されてしまう、という部分（資料内34頁）	自分が受けてきた社会の授業では、天皇は象徴として存在するので政治的な介入はしない、というような内容が強調されていた。しかし、天皇や皇族の言葉や行為が国民感情を動かし、間接的とは言え結果的にそれが政治的な干渉となる可能性を考えると、果たして本当に象徴天皇制の在り方は正しいのかを考える必要があると考えた。
前田修	天皇皇后がこぼれ落ちそうな人々の国民統合を図ろうとすることは好ましく聞こえるが、本来は政治がなんとかすべきであるという点（34ページ）	普段のニュースでそのように感じることもあり印象に残ったから。確かに天皇皇后が被災地などを訪れて励ましの言葉をかけることは被災者からすると安心感はあるだろう。実際に能登半島地震の時に天皇皇后は能登町を訪問した。しかし、肝心の政府の自衛隊増強や海外からの支援の受け入れなどの対応に対して不満を抱く人が多くいて今も苦しい生活を送る人がいることを忘れてはならない。あくまで天皇は象徴であって社会を支えるのは政治であると感じた。
吉野哲平	昭和天皇と平成天皇の象徴としてのあり方の違いについて述べられていたところ。 27ページ	昭和天皇はその存在自体に威厳があり、「いればよい」象徴として受け止められていたのに対し、平成の場合は同じあり方では国民から無関心で終わってしまう可能性がある指摘されている。そのため平成の天皇は、被災地訪問などを通して積極的かつ能動的に行動していることを思い出した。私は日ごろ天皇のことを意識することはほとんどなく、何か行動があったときにニュースで目にする程度である。しかし、この議論を読んで、天皇の行動が時代ごとに異なる意味を持ってきたことが分かり、象徴天皇のあり方は固定されたものではないのだと感じた。
米江琳香	p 3～4 若い世代にとって天皇という存在は遠くて、かわいらしい夫婦で理想だというイメージ	天皇が国民に寄り添う姿をテレビで多く見ていて、微笑ましいという印象を自分も持っていた。そのため、その裏にある天皇の公務内容や天皇制に関わる疑問を天皇の退位が話題に上がるまで抱くことがなかった。高齢になるにつれて増える天皇の身体的な負担を考え、天皇制をどのように存続させていくかを先延ばしにせず考える必要が国民にもあると思った。